

5 子供の育ちの姿から探る

👉 こんな実践

地域の名産物であるスイカについて、身近すぎることで興味・関心があまりない生徒。その姿から、地域のスイカを誇ることでできる生徒になってほしいという願いをもち、実際にスイカ栽培に取り組んだ事例。


実践学校 G中学校

実践学年 中学校3学年

実践時期 5月上旬

単元名 「スイカプロジェクト～私たちの足跡を地域に伝えよう～」

(1) 生活の中で子供の願いや問いを探る

- 2年生の時、スイカの名産地であるA地区の給食で地元のスイカが出ました。そのスイカを残す生徒の様子を見てなぜ残すのかを聞いたところ、「食べ飽きた」「家でたくさん食べている」という理由が返ってきました。さらに、A地区のスイカはどうしておいしいのかを問うと「分からない」という答えが返ってきました。その様子から私は地元の名産であるスイカに誇りをもち、A地区のスイカを語れる生徒になってほしいという願いをもちました。そのような願いを生徒たちに伝えたところ、生徒たちも「A地区のスイカがなぜおいしいのか、有名なのかを知りたい」という願いをもっていることが分かり、A地区のスイカについて追究していく「スイカプロジェクト」が立ち上がりました。
- 
- 2年生では、「A地区のスイカがなぜおいしいのか、有名なのか」等について、インターネットや地域の農家の方への聞き取り調査を行い、学校の生徒に伝えたいという願いをもち、模造紙にまとめて掲示することにしました。そして、3年生になった生徒たちは2年生で調べたことを基にしながら「実際にスイカをつくるのがどれほど大変なのか知りたい」「自分たちの作ったスイカと、A地区のスイカの甘さを比べてみたい」という思いへと変化し、地域のスイカ農家の方の協力のもと、実際にスイカをつくることになりました。その際に、全体計画とのつながりを基に作成した観点別学習状況の評価が以下のものです。

【G中学校の全体計画】

ふさわしい 探究課題	育成を目指す具体的な資質・能力		
	知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
・ふるさとA地区の身近な自然環境・歴史・産業の特色。	ア 身近にある豊かな自然や歴史, 産業を知り, 自分たちの生活と関連づけて考えることができる。 イ 地域活性化のために努力している人の活動を見聞きしたり, 活動に参加したりして, 地域の人々の思いや願いを知ることができる。	ア 対象にふれ, 興味・疑問から追究の視点を持ち課題を見つけ, 解決するための学習計画を立てることができる。 イ 課題解決に向けて意思決定をし, 学んだことを自分の生活や進路に生かしながら, よりよく生活する方法を考え, 行動することができる。 ウ 体験や情報を基に自分の考えの根拠を明確にしてまとめたり伝えたりすることができる。	ア 友達や対象となる人の考えを認め, 自分の考えや思いと比較し, 似ているところや違いを明確にしながらか自分の考えを深めていくことができる。 イ 身近な地域と様々な地域を環境・歴史・産業などの視点から比較しながら, ふるさとA地区の文化や産業の特色に気づき, よさや社会の一員であることを自覚することができる。 ウ よりよい町作りのために努力している地域の人々の思いや願いに寄り添い, 自分もふるさとのために地域の一員として社会を創造していこうとする気持ちを育てる。

【評価規準】

A 知識および技能	イ A地区のスイカ農家であるBさんの生き方や, 地域活性化のために努力している人の活動を見聞きしたり, 実際にスイカを育てたりして, スイカ栽培の大変さや農家の人々の思いや願いを知ることができる。
B 思考力, 判断力, 表現力等	ア 伝えたいことをより効果的に伝えることのできるものにしていくための方法について考えたり, 学習計画を立てたりすることができる。 ウ スイカ栽培の体験や, これまで調べてきた情報を基に, 自分の考えの根拠を明確にしてまとめたり伝えたりすることができる。
C 主体的に学習に取り組む態度	ア 友達や対象となる人の考えを認め, 自分の考えや思いと比較し, 似ているところや違いを明確にしながらか自分の考えを深めていくことができる。

上記の評価規準を設定する際には, G中学校の全体計画にある単元で実現が期待される「育成を目指す具体的な資質・能力」を基にしながら具体的な生徒の姿として描き出しました。また, 期待する資質・能力が発揮されているかどうかを把握し, 具体的な生徒の姿を見取るに相応しい評価規準であるかを検討し, 「育成を目指す具体的な資質・能力」の, どの項目とつながりがあるのかをカタカナを用いて明確にしました。



ここがポイント!

生活の中に見られる子供の様子や会話に着目し, 期待する子供たちの姿をイメージしましょう。その後, 全体計画にある「地域のひと・もの・こと」と, 子供の姿を結びつけながら活動をイメージしましょう。また, 評価規準を作成する時には, 全体計画とのかかわりに留意しましょう。

教科・領域等 [総合的な学習の時間]

(2) 具体的な学習状況の評価の方法

- C生は給食の時間に野菜を残すことが多い生徒です。小さい時から野菜が嫌いであるようでした。「少しでもいいから食べよう」と声をかけますが、C生は野菜に手をつけようとせず、お皿に盛られた野菜のほとんどを友達にあげる姿が見られました。また、給食に地域で栽培されたスイカが出た時にも、C生はスイカをそのまま残飯として残しました。理由を聞くと、「食べ飽きたからいらぬ」という言葉が返ってきました。そのような中、スイカの苗植えを終えたC生の生活記録に以下のような文章が書いてありました。

スイカをつくるだけでもかなり大変なのに、夏って、暑さでいつ倒れてもおかしくない時に作るのだから本当に大変だと思った。出荷する人はもっと大変だ。

- 野菜が嫌いであり、スイカを残す姿が見られていたC生でしたが、スイカの苗植えを終えた時から、給食の野菜をじっと見つめ、少しずつ食べるC生の姿が見られるようになりました。「野菜嫌いだったよね。どうして食べるようになったの?」と理由を聞いたところ、「食べないといけないと思ったから」とC生は答えました。このようなC生の様子から、スイカの栽培を自ら体験していく中で、給食に出ている野菜の背景に生産者がいることを再確認し、その生産者と自分を重ね合わせながら食に対する自らの意識を問い直していくC生の姿があったのだと考えました。その様子から以下の評価規準を基に評価を行いました。

A 知識および技能	イ A地区のスイカ農家であるBさんの生き方や、地域活性化のために努力している人の活動を見聞きしたり、実際にスイカを育てたりして、スイカ栽培の大変さや農家の人々の思いや願いを知ることができる。
-----------	---



評価	暑い中でのスイカの苗植えを行うことで、スイカ栽培の苦勞に気づき、様々な野菜の背景には苦勞して生産している人々がいることを再確認することができた。自分が普段食べている苦手な野菜への向き合い方を変化させる様子が見られた。
----	--

- 8月下旬にはスイカが育ち、収穫を行いました。その後、生徒たちが立てた「私たちが農家のスイカの甘さはどの位違うのか」という問いから、糖度計による測定を行いました。結果、農家のスイカと同様の糖度が生徒たちのスイカにも出ました。その事実を基に「なぜ自分たちが作ったスイカが農家と同様の糖度になったのか」という新たな問いが生まれ、話し合い活動を行いました。「私たちは農家のBさんに教えてもらい、作った環境が同じだったから」「苦勞しながら大切に育てたから」等の意見が出る中、D生は「農家の方も苦勞して大切に育てているし、自分たちが作ったスイカの土は火山灰ではない。だから環境は違う。でも、なぜ同じ糖度が出たのか分から

ない」と発表しました。そんな時、家庭でスイカ農家を営んでいるE生が「育て方が違うからだと思う」と発言します。詳しく聞いてみたところ、通常は一本の苗木から2つのスイカを栽培する農家に対し、生徒たちのスイカは一本の苗木から1つのスイカを収穫したことで、甘さが集約されたことによる結果ではないかということです。農家の方に聞いたところ、E生の意見が正しいのだろうという考えに至りました。この事実からD生は振り返りカードの中に「理由が分かりすっきりした。農家さんは一本の苗木から2つのスイカを育てているのに、糖度が高いのはすごい」という記述がありました。改めて生徒たちはA地区のスイカ農家のすごさを実感することができたのだと思います。このような姿を基にD生を以下のように評価しました。



C主体的に学習に取り組む態度	A 友達や対象となる人の考えを認め、自分の考えや思いと比較し、似ているところや違いを明確にしながら自分の考えを深めていくことができる。
----------------	---



評価	高い糖度が出た理由についての話し合い活動を行う中で、調査活動で知り得た火山灰に着目しながら生育環境の違いについて考えるとともに、友達の栽培方法という視点を取り入れながら農家の方の努力に気付くことができた。
----	--



ここがポイント！

授業の中だけでなく、普段の生活や日記、生活記録等にも子供の思いや変容が表れます。授業後に表れる子供の様子を記録として残し、蓄積することで具体的な評価につなげましょう。

まとめ

探究的な学習を進める過程の中では、日常生活では思ってもみなかった姿が見られることがあります。子供の捉えを広げていき、その捉えや育ちを学級や子供に教師が返していく（評価する）ことで、自らの“よさ”を実感し、新たな活動や生活の自信へとつながっていきます。評価の際には、全体計画と評価規準との関わりに留意しながら行いましょう。